

第3回 旧山陽道を歩く (東尾道駅～尾道駅まで)

探訪・徒歩コース (地図を参照)

- (地図1) ① 東尾道駅(スタート)～大元神社～大元山古墳跡～高須八幡神社
② 恋の水碑～掘出地蔵尊～讚大松の碑
- (地図2) ③ 諏訪加茂神社～大田貝塚跡～高須一里塚跡碑
④ 大田の辻堂～四十九番札所～新池・古池～六字名号碑～防地峠の坂
- (地図3) ④ 防地峠・藩境碑・番所址
⑤ 浄土寺山(瑠璃山)山頂・奥の院(峯の薬師堂)～周囲の景観を観察
おいしい弁当と楽しい休憩
⑥ 尾道東高等学校内の常夜灯と美美子記念碑
- (地図4) ⑦ 光洋マッチ工場跡～山脇神社～久保小学校校舎～西郷寺
- (地図5) ⑧ 正念寺の延命水～防地口
⑨ 建物疎開によって出来た国道～灰屋橋本家別邸～元図書館跡の門柱
⑩ 厳島神社・八坂神社とかんざし灯籠、大形の玉乗り型狛犬
⑪ 勸商場と石段～石屋町～常称寺山門
⑫ 神鎮小路～熊野神社・水尾井
- (地図6) ⑬ 丹花小路と常夜灯～狭い路地を通る
⑭ 杓屋小路～長江口(戦時中拡張される)～小川小路
⑮ 米場町～おのみち歴史博物館
- (地図7) ⑯ 薬師堂浜(東浜)～住吉神社～荒神堂
- (地図8) ⑰ 浮御堂小路～尾道商業会議所記念館～奉行所跡
⑱ 一里塚跡～本陣跡
⑲ うずしお小路～美美子碑前(到着・解散)

(おまけのコース)・・・時間があれば「喫茶店の美美子」で林美美子が間借りしていた部屋を見る。その後、香り高いコーヒーと感想を交えた歓談のひと時で疲れを取り、解散する。(希望者のみ、コーヒー代は自己負担)



福山市側から見た大元山古墳跡の遠景と平山古墳跡(右)

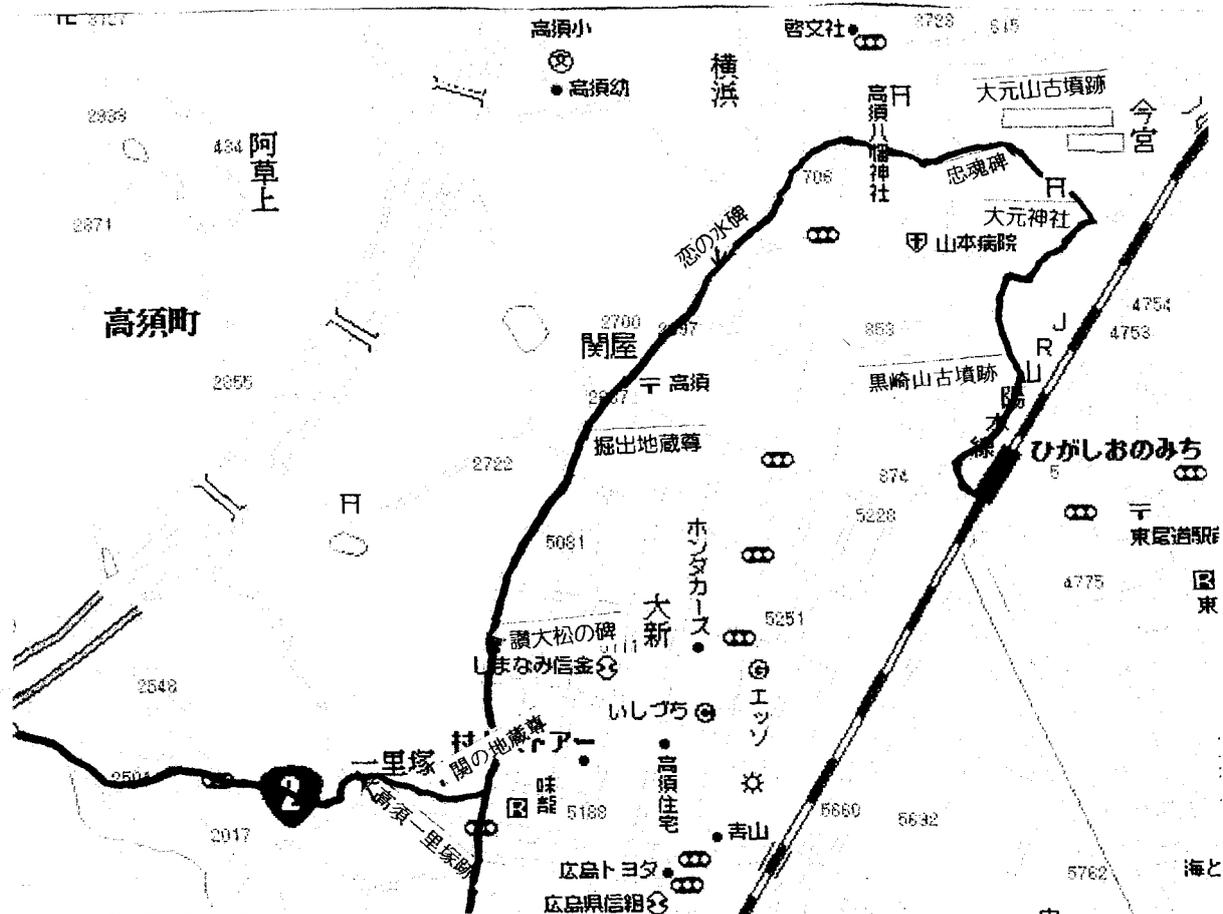


福山藩の藩境碑

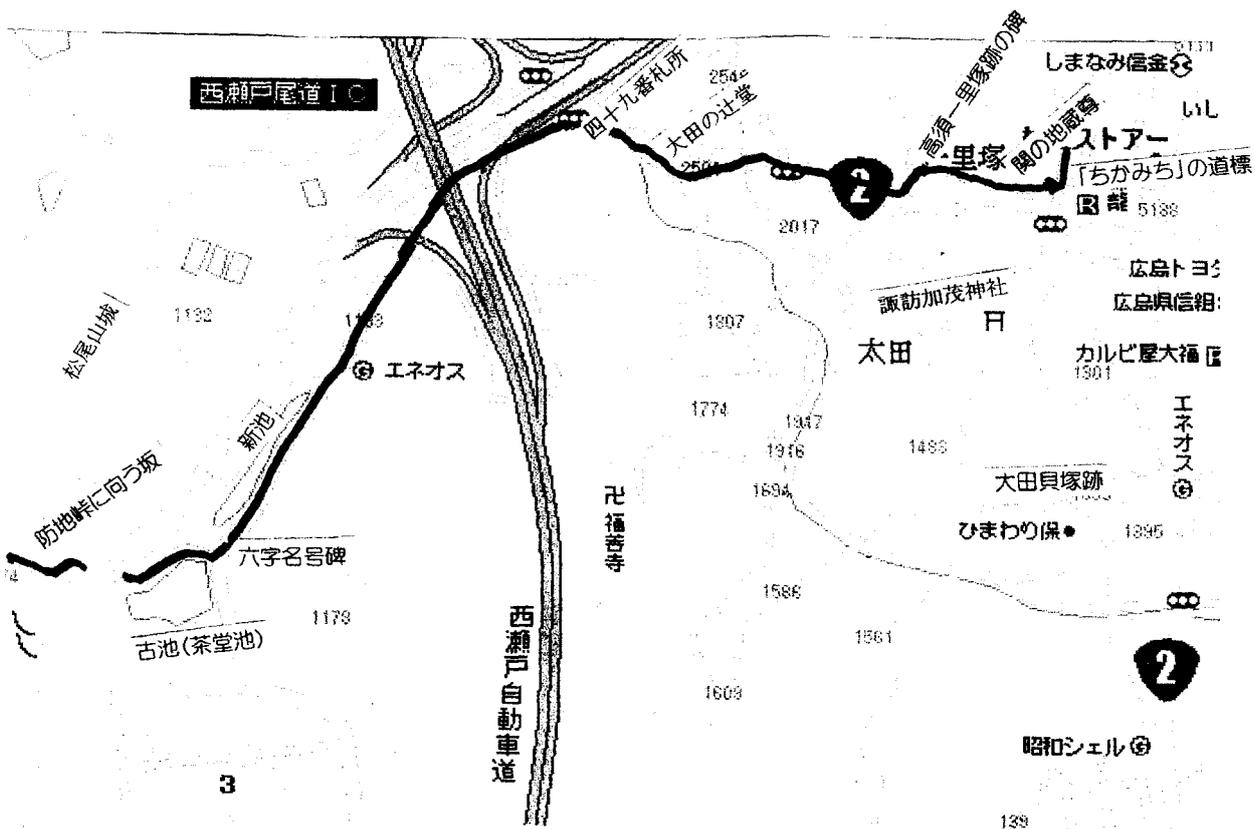


防地峠と藝州藩の藩境碑

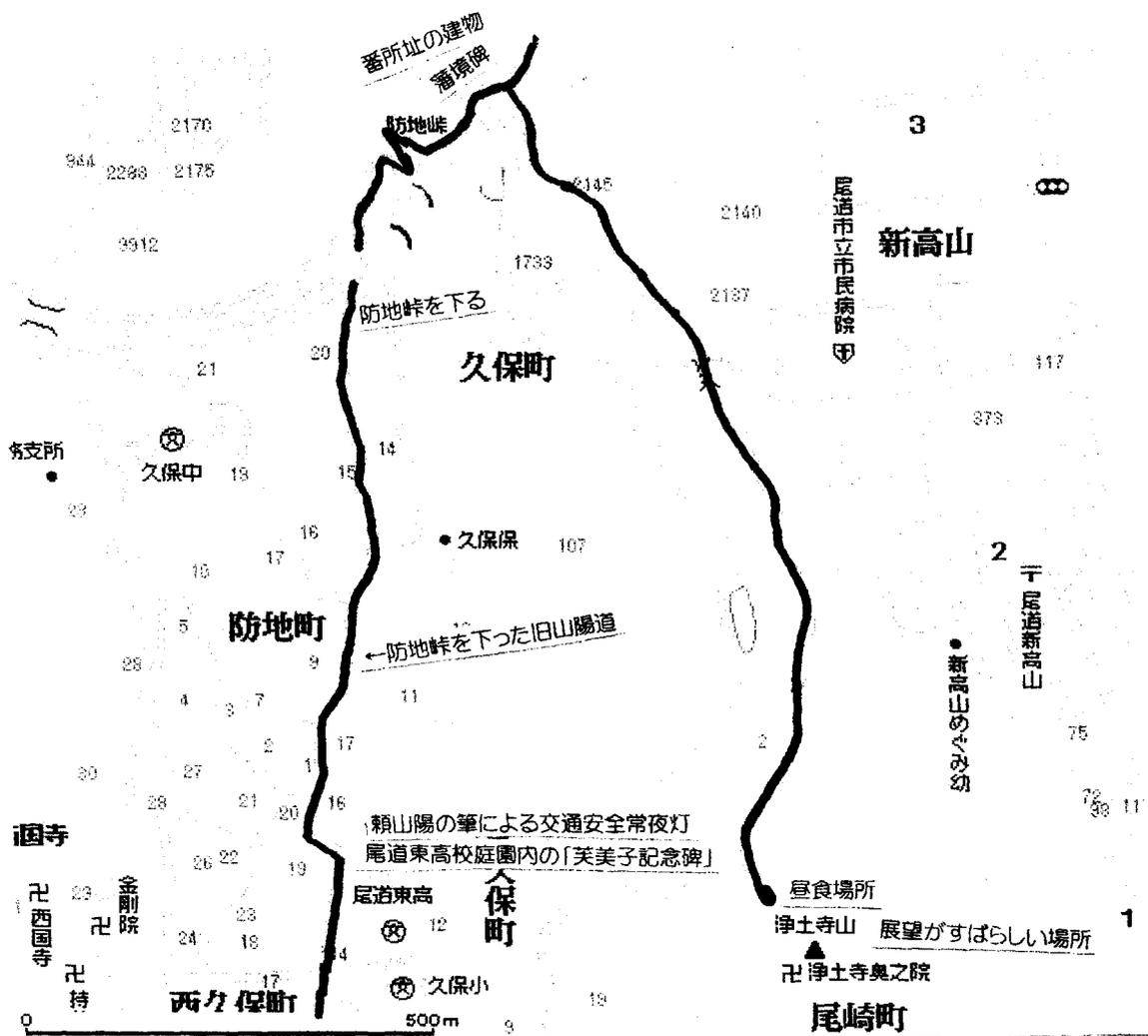
旧山陽道歩きコース地図



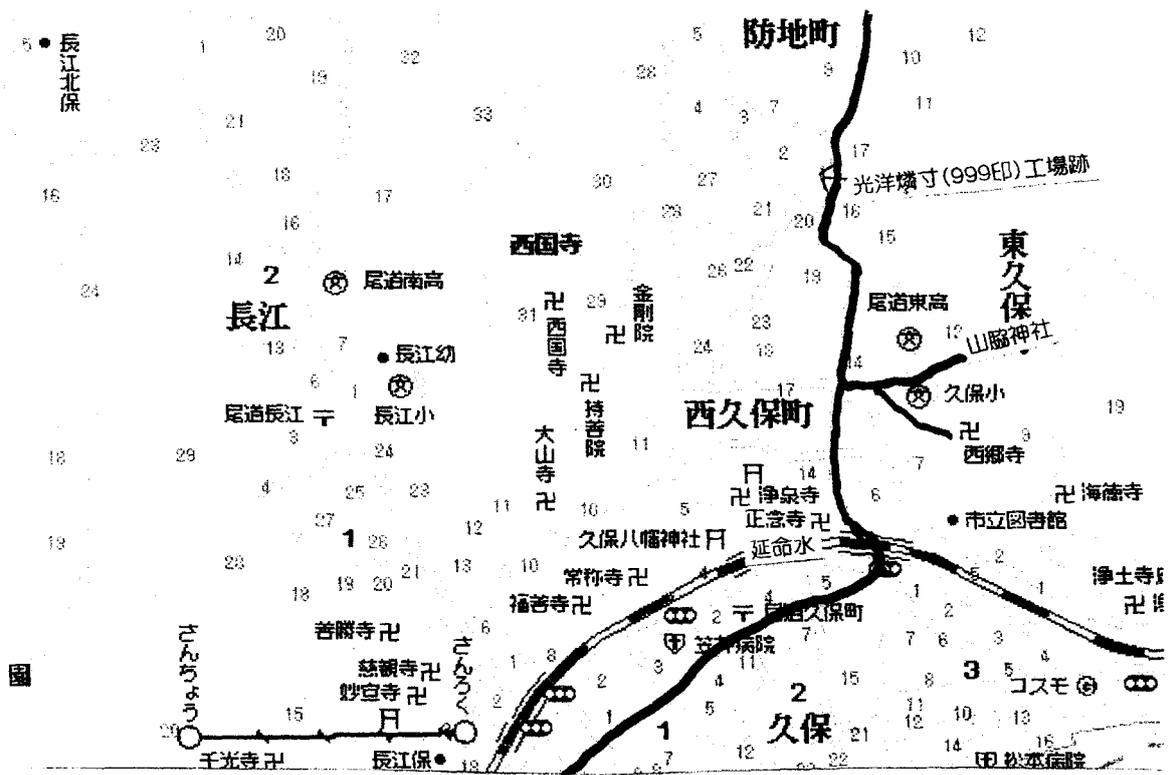
(地図1) 東尾道駅(出発) 大元山古墳跡 高須八幡神社 恋の水碑



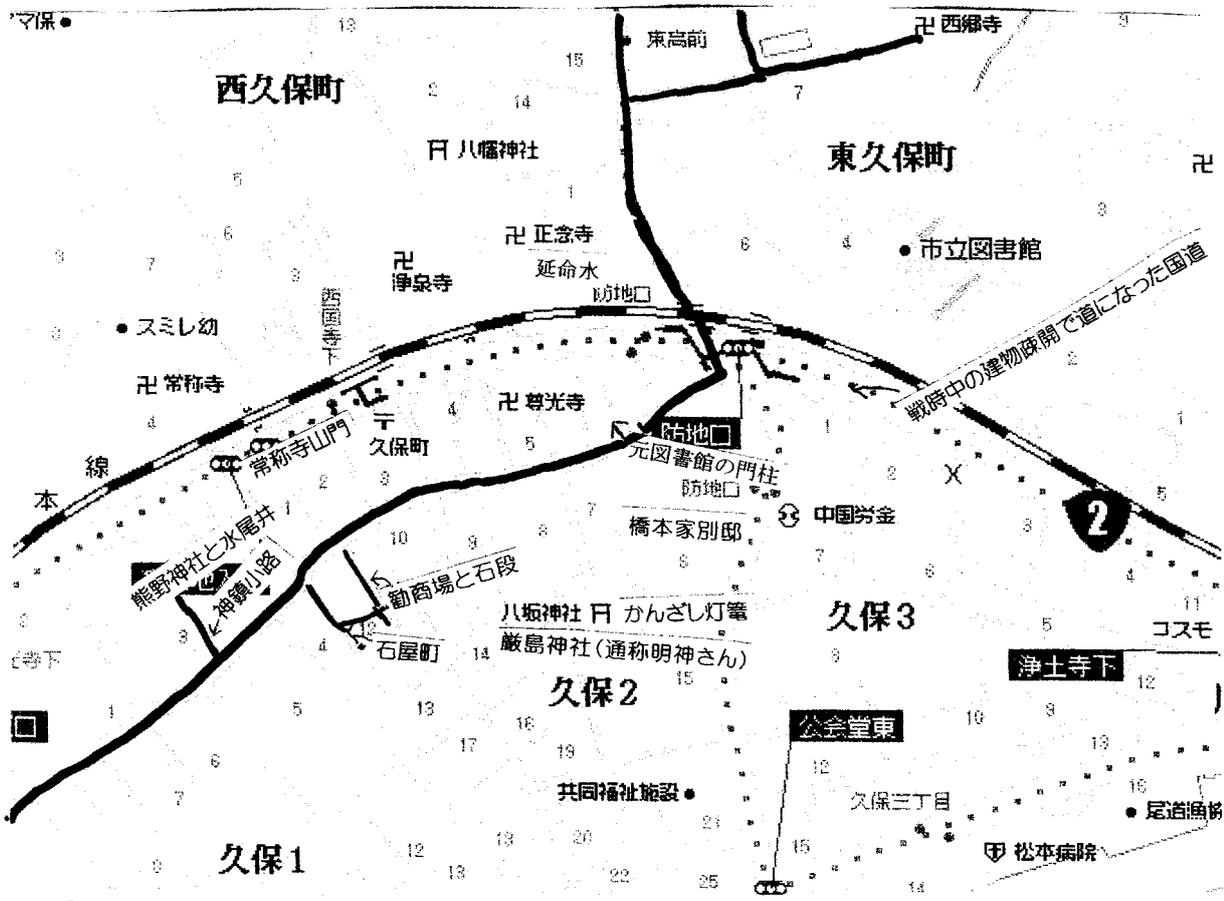
(地図2) 諏訪加茂神社 大田貝塚跡 関の地蔵堂 一里塚跡



(地図3) 防地峠 藩境碑 番所址の建物 浄土寺山頂上(昼食)



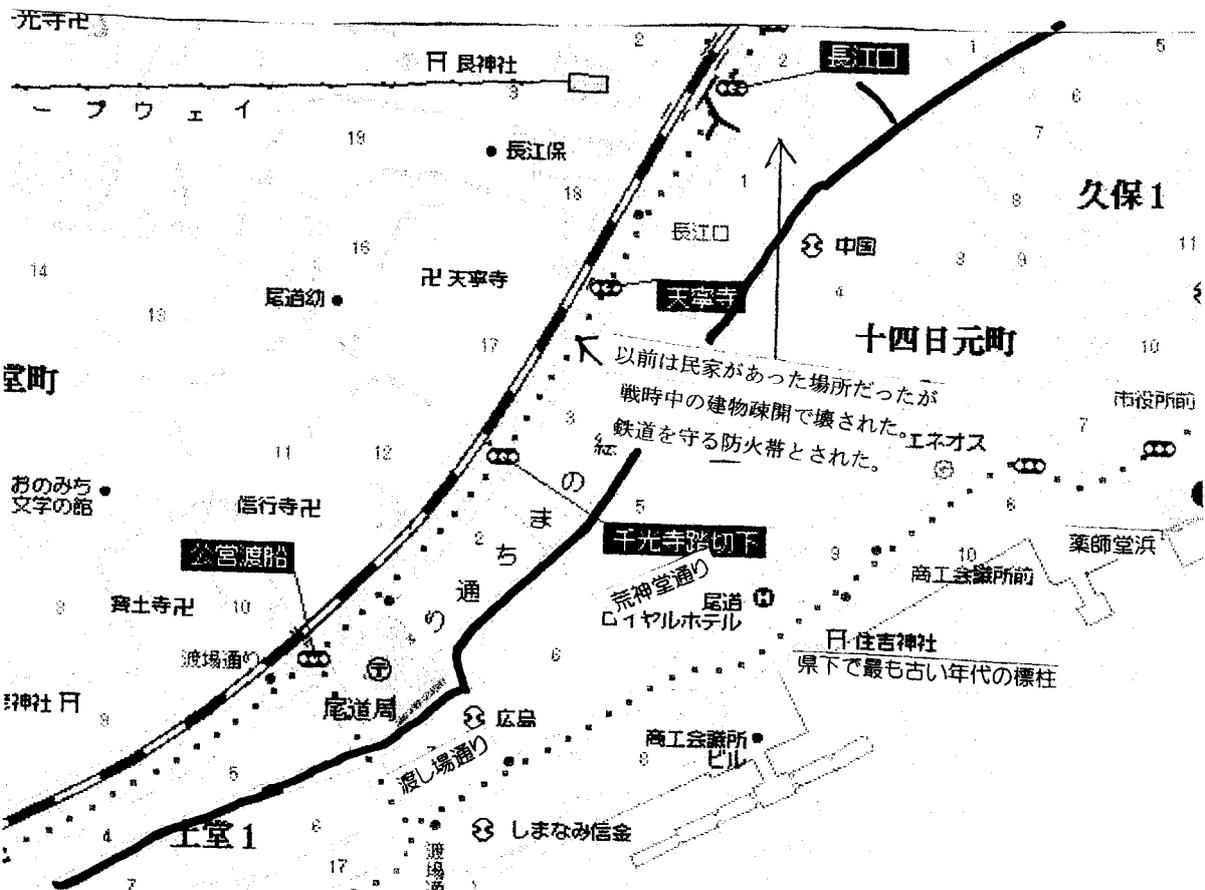
(地図4) 防地峠を下る 尾道東高校の美美子記念碑 頼山陽の筆による常夜灯



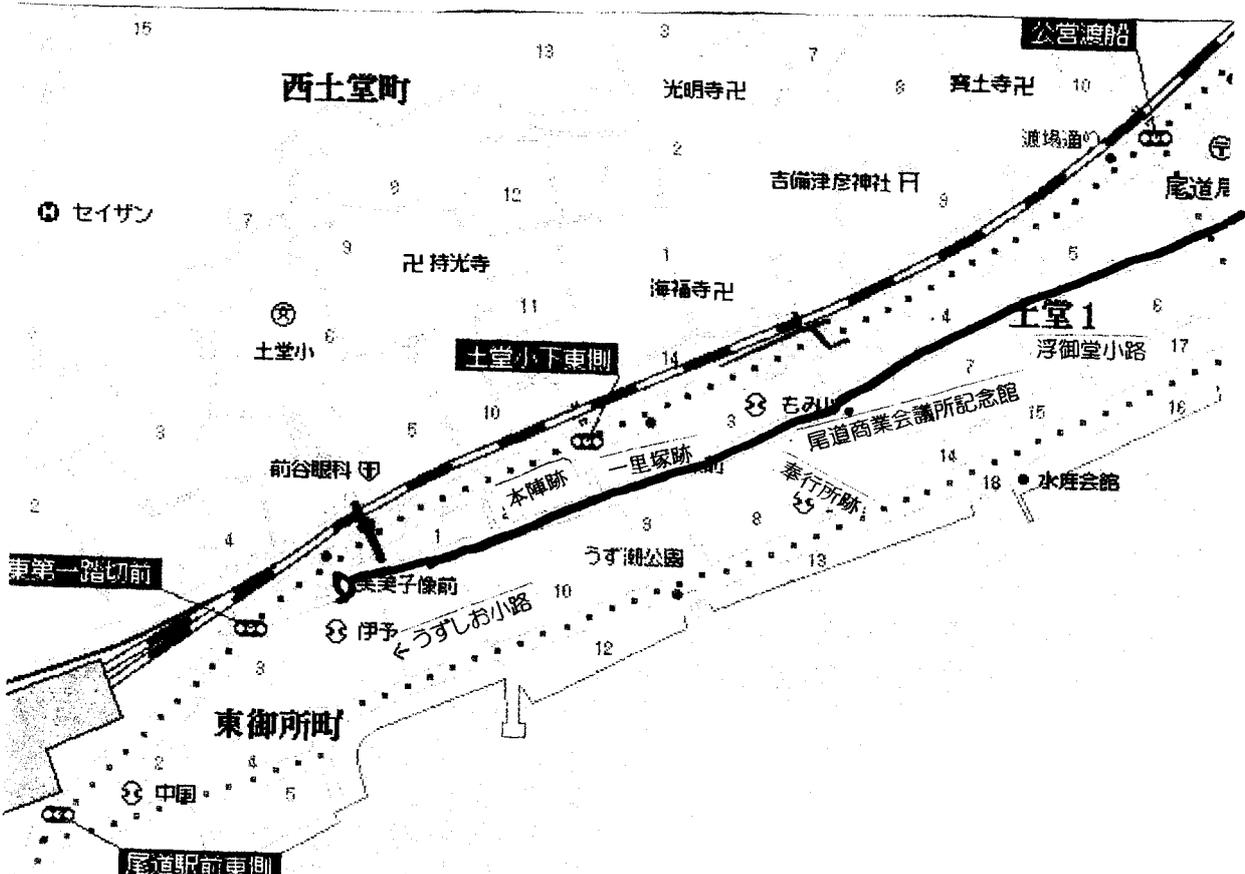
(地図5) 久保町中心部 防地口 巖島神社(八坂神社) 勸商場 石屋町



(地図6) 久保町~十四日町(長江口)附近 神鎮小路・熊野神社・水尾井
丹花小路・常夜灯 杓屋小路 長江口 米場町 おのみち歴史博物館



(地図7) 土堂町 薬師堂浜 住吉神社 荒神堂通り 本通りを行く



(地図8) 土堂町～美美子像前 尾道商業会議所記念館 奉行所跡 一里塚跡

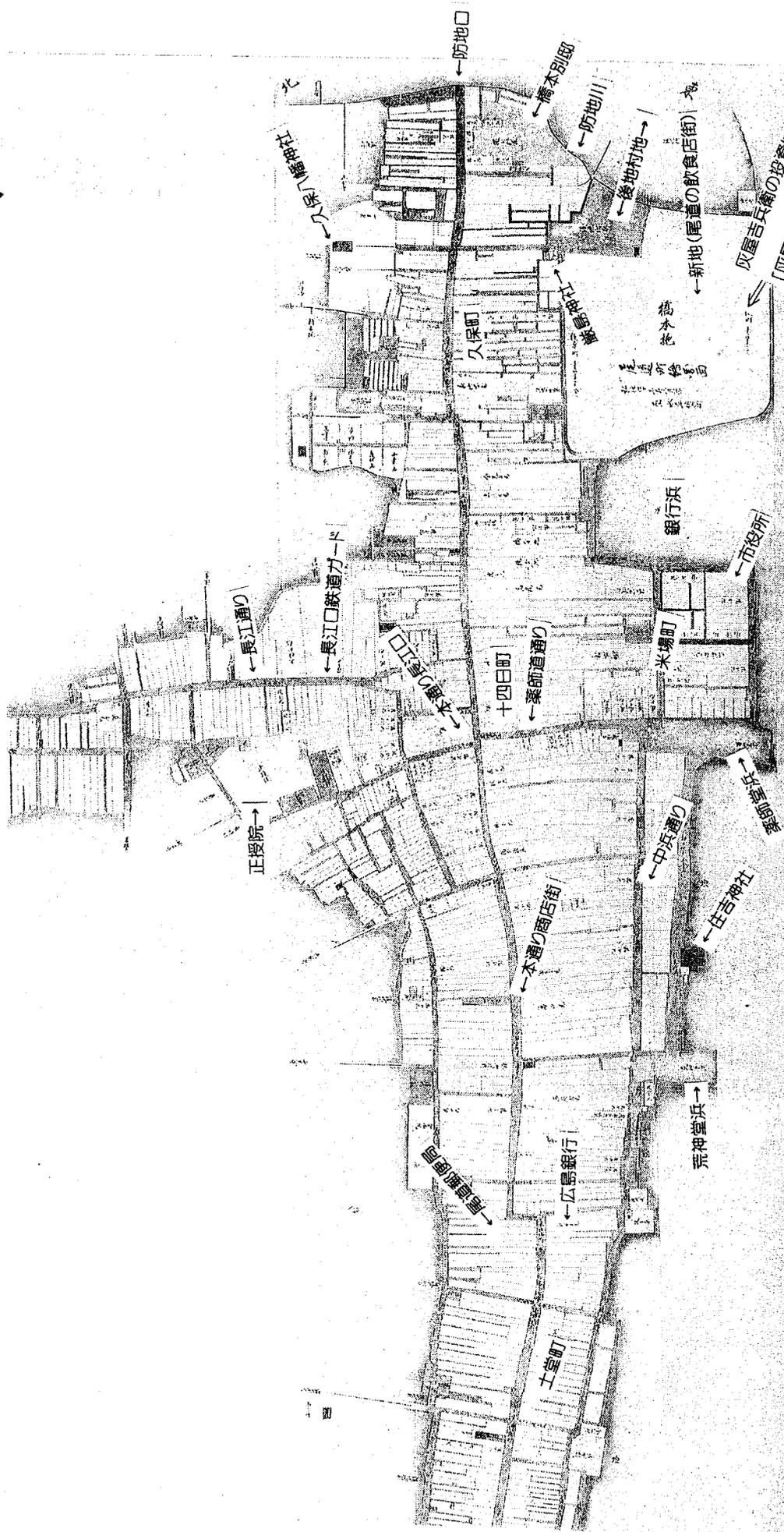
うずしお小路 美美子像前(終点)



尾道市街圖誌

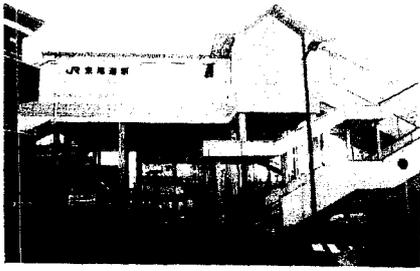
縮尺六分之二

尾道俱樂部
一丁四



尾道街惣図 弘化四年(1847)八月

灰屋吉兵衛家は尾道で問屋商事のほか、塩田経営や金融業を営み、新田開発に積極的に投資を行っていた。この絵図は、中に「橋本抱」と記されている。自分の借屋を管理するため、灰屋吉兵衛が大工水草伝兵衛に命じて作成したものである。文政四年(1821)には尾道の全戸六九六戸のうち八六戸が灰屋の所有となっている。(平成2年度企画展 近世尾道の発展と商人 県立古文書館の企画展資料より)



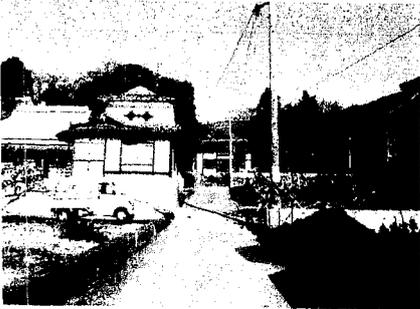
集合場所の東尾道駅。山陽道歩きはここからスタートする。



駅から東へ進む。大元山古墳跡が見えてきた。



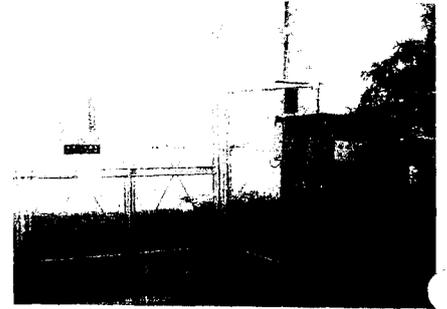
村道を行くと常夜灯がある。



大元山下にある「厳島神社」(大元神社)が見えた。



高須浄水場跡になっている大元山古墳跡地。



浄水場跡は整地され、厳重な柵によって中に入れない。2年前には入れたのに残念である。

厳島神社・大元神社

祭神は伊弉諾命・伊弉册命・市杵島姫命の他六柱の神々を祀っている。「大本権御祭礼当番帳」(天明5年)には、社名を大本(大元)神社と記している。

厳島神社は往古より小社であった。次第に破損し、天文16年(1547)大元神社に合祀された。また大本社・山王社は往古に勧請されており、慶長17年(1612)に再建され、山王社と称したが、延宝7年(1679)に大本神社に合祀された。

大本神社は、現在では社名を厳島神社と云っている。沼隈郡誌には「池の浦厳島の社地を昔鶴山と稱せり」とある。創建当時の厳島神社はちょうど鶴の首の部分の浜辺に位置し、参道は海の中にあり、大鳥居を有していた。現在の登り口三差路に防火用水を掘っていると大鳥居の根っこが出土した。(高須知っておきたい今昔マップより)

大元山古墳と周辺の古墳

大元山古墳は、鶴山と呼ばれていた大元山にあった前方後円墳で、地元では隣の黒崎山古墳より大きな古墳であったと云われている。古墳は前方部を東南に向けられ、後円部に忠魂碑が建てられていた。昭和33年に調査されないまま浄水道用地として自衛隊のブルドーザーで削られて浄水場となってしまった。後から調査した結果、直刀、鉄鏃、円筒埴輪の破片が出てきた。尾道市史(第一巻)には「埋葬形式は堅穴で後円上層部から出た副葬品で(古墳時代)中期の推定」としている。

古墳の規模は50mから70~80mとも云われるが150m説もある。ここで田口会長の話を聞きましょう。(資料参照)

黒崎山古墳も前方方円墳で前方部が南面に、後円部が東北に向いていた、という。山と古墳は削られてボーリング場となり、その後住宅団地になっている。当時の面影は全く無く痕跡は残っていない。

平山古墳は大元山古墳の東隣の丘にあったと云われている。だが高西中学校建設によって削られ、内容は不明である。高西中学校の校歌に「鶴羽ヶ丘」という歌詞があるように大元山を胴体として黒崎山と平山が鶴の羽を広げた形をしている、といわれている。これらの山は海中に突き出した小島であることが周辺の地形から理解できる。現在は住宅地になっている。



元古墳の上にあった忠魂碑。移転は自衛隊によって行われた。



忠魂碑の台座そばにある砲弾。時々日露戦争当時のものを見かける。



後から高須八幡神社に入る。新しくなった社殿である。

高須八幡神社

この今宮山も古墳があった場所と考えられている。創祀は天文16年(1547)に勧請され慶長4年、安政7年に再建、文久元年に焼失し明治11年に再建された。祭神は品陀和気、帯中津日子命、息長帯比賣命である。『西備名區』には「当社地元島山なりしを萬治二年(1659)本庄左衛門(重政)新開奉行として此沖を築切り新開となすより陸路に続き、官道も西村へ通せしを此地の北邊に通して尾路に至る」と書かれている。こうして旧山陽道は今津村から高須村の山際を通る道となり防地峠に向う。

下の絵馬は古い拝殿に掲げられていたもので新しい拝殿が出来て取り外されている絵馬の一部である。



黒く塗りつぶされた絵馬。天皇を描いているため戦後GHQを恐れ消去



父楠木正成と子正行の有名な桜井の別れの場面を描いた絵馬。戦前の教科書にも取り上げられている。昭和八年 竹内亀之助



「矛」の石造物がある。尾道以外の神社では見たことがない。



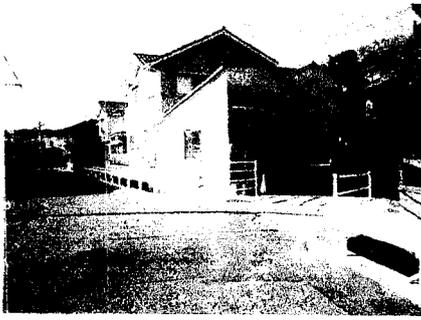
明治天皇崇拜碑



「日支事変武運長久」と刻まれた標柱。個人による奉獻である。



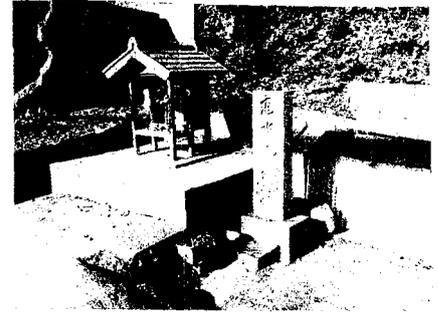
神社前から国道を越えて入る前の道が、旧山陽道である。



直進する道は新しい道で、旧道は右に曲がる。



すぐ道は合流した。真っ直ぐ進む。



恋の水の碑。昭和五十四年建之と新しい。隣の祠は第二十五番室戸津照寺である。

恋の水碑

この碑の由来について『尾道の民話・伝説』の中に、次のような話書かれています。九州の薩摩藩第十六代の藩主（1533～1611）島津義久侯の頃のお話です。義久侯が参勤交代のため上洛の途中、ちょうど高須の中ほどにさしかかったとき、たいへんのどが乾いてきました。侯はそばつきの家来に水をさがさせました。そのときさがして差し出したのが、この恋の水だったというのです。

行列は進んでやがて今津村に着きました。そのころ今津村の庄屋をつとめていた河本という家にしばらく滞在されましたところ、なぜかひどい熱病にかかられました。侯はしきりに水をほしがられますので、おそばの家来たちはこの村の水をくんできて差し出しましたが、どれも気に入りません。侯は「来る途中高須で飲んだあの水をもう一度飲みたい」としきりに恋しがられたそうです。

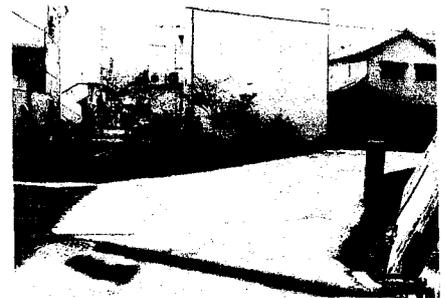
そのときから、この話があたりには伝わって、誰言うとなく「恋しい水」、それがいつの間になまって「恋の水」と云うようになったといひます。



掘出地蔵尊。「昭和四十九年八月堂宇再建」の棟札がある。



大松があった場所に建立されている碑。



右の旧山陽道の角に「右ちかみち」と刻まれた道標がある。左の道を進むと「大田貝塚」に行く。

大田貝塚

現在貝塚の周辺は住宅地になっているが、昭和20年代頃までは一面田んぼが広がっていて、当時とはまったく様子が違っている。大田貝塚跡の一部は史跡として保存されていて史跡の碑が建てられている。碑は二基あり、古い碑には「昭和九年建之高須貝塚跡 高須村少年團」と刻まれている。新しい碑には「昭和五十年建設 広島県史跡大田貝塚」とある。大田貝塚は、大正15年5月長崎の人手で考古学愛好家の佐藤真穂氏による縄文式土器の破片を発見したことに始まる。

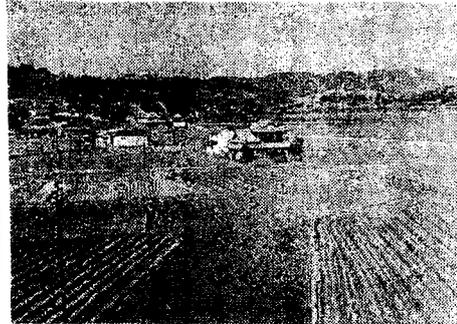
発掘は京都大学の清野謙次博士の指導のもとで、尾道高等女学校芳の益見氏、沼隈郡郷土史研究会員20余名が参加して行われた。こうして貝塚層の下から埋葬人骨が100体前後出土した。完全な骨格のもの66体については、調査された清野博士の「原日本人」説の研究の一部に使用された。

埋葬について屈葬が 15 体、他は伸展葬である。出土品は土器の破片が多く石器類は磨製の石斧、打製石器はサヌカイトである。貝類はもがいが中心で他にカキ、はまぐりとなっている。遺物の殆んどは京都大学が持ち帰ったが、一部は高須小学校の旧校舎にあり、中学 1 年生の時先生に引率されて、昔のままの防地峠を越えて見学に行ったことがある。大田貝塚は貝の層で白くなっているのかと思っていたが、黒い田んぼに白い貝殻がわずかに散らばっていただけで、「なんだ これが先生の言っていた貝塚か」とがっかりして見ていたことを思い出した。また小学校にあった骨や土器の破片はじっくりと眺め、先生の話聞いた。そうしたことが思い出としてある。

こうした人骨や土器片は市立美術館に展示保管されている。



草だらけの大田貝塚跡。大正十五年
に京都大学が発掘し六十余体の人骨
が出た。



発見当時の大田貝塚
(尾道市史より)



碑のそばに、古い史跡の碑がある。
「昭和九年建之 高須貝塚跡」の碑。
「高須村少年團」とある。



関の地藏尊。道の上にある。



電柱のところに一里塚の碑がある。



これが高須一里塚の碑。

関の地藏尊

岐阜県関市より祭神を持ち帰り祀ったという。この地藏は、咳・喉に効くとされ、ご利益を受けた人が次々と地藏を奉納され増え続けて、30 体以上となった。今も参拝者は多い



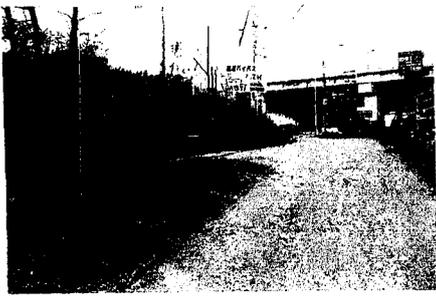
旧山陽道はこの丘を登って行くが、
今は通れない。左の迂回路を下る。



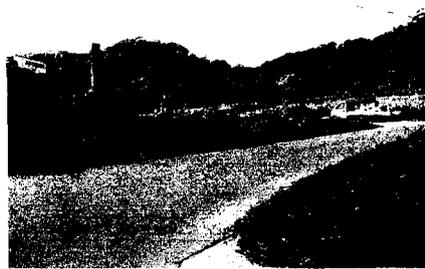
左の道を下って進む。



大田の辻堂がある。



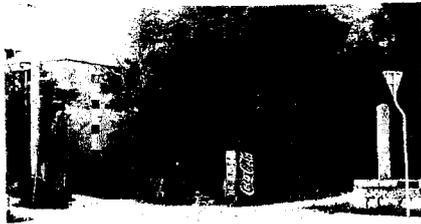
左に小さな祠がある。この場所は昔の感じが残り、道も狭かった。



右が新池、左が茶堂池(古池)の間の道を行く。左に徳本上人の「南無阿弥陀仏」六字名号の碑がある。



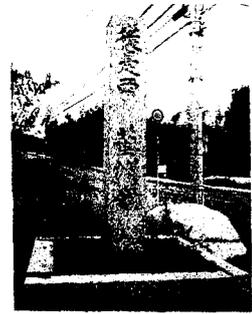
上り坂であるが、道幅が広がっている。



ここから先が藝州領(広島藩)で、道は下りになる。右端に藝州領の藩境標が見える。



福山藩の藩境標。全部の面に「従是東 福山領」と刻んである。



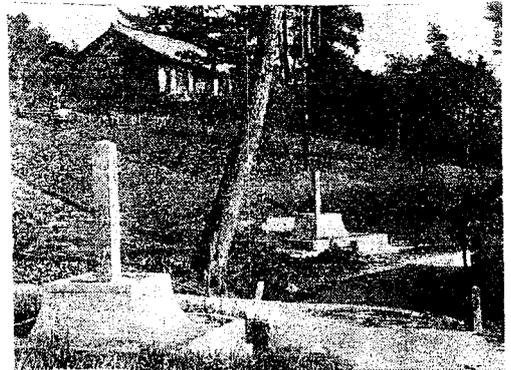
福山藩より少し大きな藩境標。「従是西 藝州領」と刻まれている。



両方にあった番所の建物は、残っているのは福山藩側だけである。



住宅として使われていたが、今は無人である。



尾道番所(旧福山藩)(昭和10年頃)

防地峠と藩境碑

高須町大田の辻堂からバイパスの側道沿いに坂道を上がって行くと、右手にゴルフ練習場のカンバンが見える。この山が木梨杉原氏の後裔にあたる高須杉原氏によって築かれた山城である。旧道は新池と古池(茶堂池)の北側(バイパスの道)を通っていたが、現在は池の間の道を通る。防地峠への道は急坂で旧道の面影が残っていて、峠の頂上に着くと藩境碑が見える。手前の家の近くに福山藩の藩境碑がある、道を隔てて藝州藩の碑がある。

峠の風景はすっかり変わってしまった。開発されるまでは寂しいところであった。写真を見比べて欲しい。家の後ろに番所跡の建物が残っているが、ひどい痛みようである。

屋根にはシートがかけられ、内部は農具などが置かれている。昭和20年代には岩田さんが住んでおられたのを知っている。

碑は藝州藩のほうが少し大きく「従是東 藝州領」とあり、福山藩の碑には「従是西 福山領」とある。藝州藩の碑の横を通り、尾道の市街に下って行く。左の建物は会社の寮で、尾道バイパスのトンネルの真上にある。

峠から浄土寺山への自動車道を進み、頂上の展望台を目指す。市街が一望できる絶好の場所で昼食にする。



ここから浄土寺山に登っていく。以前はこの道はなく、細い山道だった。



浄土寺山の展望台が見える。あそこで昼食をする。



左が車道で楽である。右の道と正面の林の中に入る道がある。両方の道は途中で合流する。だが健脚コースでかなりきつい山道である。さて、あなたはどちらを選びますか？



浄土寺の奥の院（峯の楽師と呼ばれている）。楠木で造られたお堂が焼けて、今はコンクリート造りになっている。



この位置から見た尾道市街の風景が観光写真としてよく使われている。



防地口附近の市街。中央の樹木は「灰屋橋本家の別邸」である。左手前の緑の屋根が「旧筒湯小学校校舎」で、右の緑の建物は「図書館」である。



ここが浄土寺山（正式には瑠璃山という）最頂上部で、以前はこの岩が展望台だった。



新しく建設された展望台。高いので周囲の景色がよくわかる。



手前が尾道造船所で、向こうが向東町。その向こうが尾道市戸崎町の半島、遠くに沼隈半島の山々が見える。



尾道大橋と向東町左上の小島は加島である。



北西方向に栗原の市街地が見える。



左に福祉村（防地峠附近）、右に市民病院と新高山団地が見える。



自動車道を下り、防地峠に戻って行くと「番所の建物」がはつきりと見えた。



碑から峠道を下って行く。左はプレス工業の寮である。



車道を行くと曲り角に地藏堂がある。



左が自動車道。右が昔の道。



下って行くと尾道バイパスのガードに出る。右に日蓮宗の「題目碑」がある。



しっかりとした石垣と塀があるのは、元伝染病隔離病院跡である。今は県営アパート地になっている。



右手にレンガつくりのマッチ工場があった。「999」(サンキュー燐寸)の商標で知られていた。



右に上がって行く丸山の道。右にうなぎの寝床のように長い敷地に、元久保中学校があった。この道を進むと、刑務所そばを通り長江通り(亀川)に出る。



左が県立尾道東高校、林芙美子が卒業した市立(後県立)高等女学校である。正面は市立久保小学校である。

尾道東高校の林芙美子記念碑と常夜灯

校門を入ると右手の庭園に林芙美子の記念碑がある。「巷に来れば憩いあり 人間みな吾を慰めて 煩惱滅除を歌うなり」と刻まれている。裏面の「林芙美子記念碑」の文字は川端康成による題字である。碑文は「改造社版の新日本文学全集にのせられた写真を拡大したものである」。

大正五年、林芙美子一家が尾道に移り住むようになったのは「此町は、祭りでもあるらしい、降りてみんかやのう」(風琴と魚の町)ということからである。こうして芙美子は尾道第二尋常小学校(現土堂小学校)に入学する。一家は市内の住所を何度も変えているが、大正六年に住んだのが宮地醤油屋(現在の喫茶芙美子)で、二階を間借りしている。大正九年にはうずしお小路の南角にあった藤原タバコ店の二階に間借りした。

芙美子は大正七年尾道高等女学校に入学するが、当時は市立だった。卒業時には県立となり、県立尾道高女を卒業して上京する。当時の尾道高女の様子は『市立女学校』の作品によく描かれている。なお県立になってから「県女」と呼ばれたが、昭和3年に開校された尾道市立高等女学校は「市女」と呼ばれ、芙美子が通っていた学校とは別である。「市女」は栗原本通りにあり、元栗原中学校があった場所である。昭和24年に廃校となる。



東高校の校門を入ると右の庭園に林芙美子の碑がある。裏面に川端康成の題字がある。



頼山陽の遺墨燈籠。約150前の往来安全の燈籠である。



女学校時代の雰囲気を感じるレンガ塀の道。市立から県立に移管されるが、林芙美子の小説「市立女学校」には当時の様子が描かれている。

尾道東高校内の常夜灯

説明板には「藪内流茶道の内海自得齋」が頼山陽に揮毫してもらい、天保年間に山陽道沿いの防地川に建てたもの。『往来安全標識灯籠』である。

山脇神社

県立尾道東高校と久保小学校の間の道を上がって行く。東高校のレンガ塀は女学校当時のものである。高台に通称「山王さん」といっている「山脇神社」がある。「祭神は大山津美之神であるが神仏混合の影響で山王大権現として親しまれている」。棟札には「享保十三年（1728）とある。（説明板による）

山王さんには、通常見かける狛犬でなく猿の石像が置かれているのが特色である。祭礼は五月半ばに行われユカタ祭りとして知られ、夏祭りのはしりである。かつて境内には榎の巨木が鬱蒼と茂り気持ちが悪いほどだった。現在は切られて明るくなっている。



上がって行くと「山脇神社」がある。通称山王さんと呼んでいる。



山脇神社の猿の石像。面白いのでよく観察して欲しい。



元に戻って西郷寺に行く。時宗の西郷寺山門。「大一房住持の発願によって建立と云う。大一房は相方城主夫人であると」説明板にある。江戸中期までは「西江寺」と云っていた。

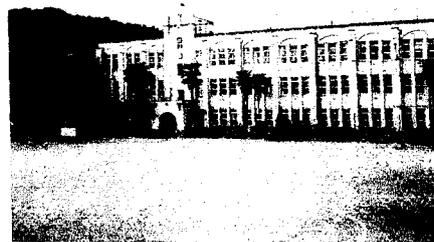
西郷寺（時宗）

山門は応永二年（1395）の創建で大一房住持発願で建立される。国重文となっている。本堂の美しい形は、市立美術館の建物が模している。扁額には「西江寺」（文和三年 1354）とあるが、江戸中期まではこのように書かれている。

本堂に入って手をたたくと音が返ってくる。鳴き龍天井である。



西郷寺の本堂。市立美術館はこの本堂を模して造られている。寺は鎌倉時代末の正慶年間に開基された。また鳴龍の本堂で知られている。



昭和八年建築の久保小学校校舎。74年の風月に耐えた風格がある。



大宮町の通り。昭和24・5年までは左半分が防地川で道幅は半分だった。

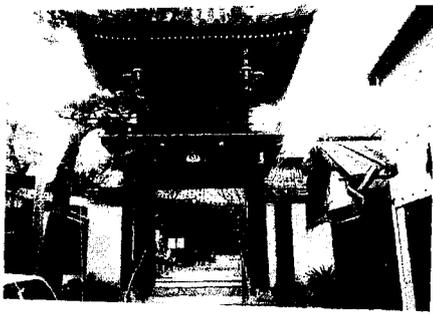
尾道市立久保小学校校舎

旧尾道第一尋常小学校で、昭和8年に建設された尾道で最初の鉄筋コンクリート造りの校舎である。がっしりとした重厚な造りは現在の建築物や学校校舎には見られない趣がある。

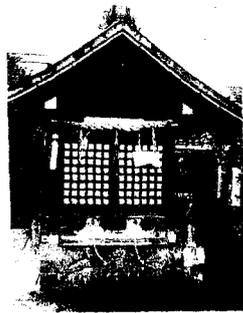
建築後74年と云うから、尾道の学校校舎近代化遺産に指定して欲しいものである。

正念寺

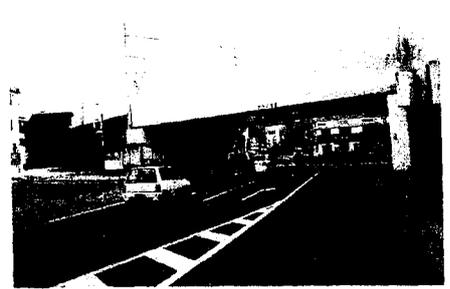
天正十三年（1585）諸国を遊行していた同念上人が足を止めて、建立したという。この寺には昔から延命水と呼ばれる井戸があり、今も名水として汲みに来る人がいる。



ガード近くの時宗正念寺の山門。
第三十一代遊行上人によって開かれた。



この寺は「延命水」で有名である。
今もおいしい水が湧き出ている。



防地口のガード。広く拡張されている。



図書館や浄土寺に行く道のガード。
手前の石積みとレンガは単線だった
山陽鉄道時代のものである。



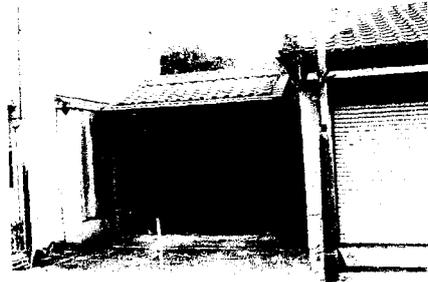
南に下る道。橋本別邸の庭は重機の
ところまでであった。



高い堀が取り除かれ、広い敷地と庭
が見える。防地川は右下を流れて海
に下っていた。



庭の前の道路が掘られて、防地川の河
岸石垣が見えている。初めて見た。こ
の石垣も壊され下水管が設置される。



これが橋本別邸の門だが、開けられ
ているのを見たことがない。



防地口から西に向かう旧山陽道。駅ま
での本通商店街が山陽道であった。

市立図書館跡の門柱

ここに市立図書館があり、その名残の門柱である。『尾道案内』には「明治三十九年八月四日 日露戦勝記念として創立せられ、私立尾道図書館と稱し、久保町尾道勸商場楼樓上に於て開館し居たるも、大正三年市の経榮に移り、現在地に建築開館せり」と書かれている。

当時の図書館は木造のがっしりとした建物で二階が閲覧室だった。学生が多く利用して、夜は9時まで開いていた。9時になると電灯が点滅し、それが閉館の合図であった。

昭和36年2月に久保八幡神社の裏山にモルタル造りの新館がオープンする。だが設備も充実せず狭いので旧市民病院跡(以前は厚生病院と云っていた)に石材を使用した豪華な図書館が開館した。平成2年11月8日のことである。



最初の図書館跡。大正4年に市立図書館がこの場所に開館した。門柱は当時のものである。



久保八幡神社「一の鳥居」 尾道で最古の鳥居で「萬治二年(1658)」とある。石屋町中の寄進で、「大工石屋子七郎 小工石屋助次」と刻まれている。



巖島神社と八坂神社。明神さんとして地元では親しまれている。

巖島神社(通称明神さん)

巖島神社は明神さんとして親しまれ、祭神は、市杵志摩姫命、端津姫命、田心姫命の三女神で、江戸中期以前は築島で海の中にあった。

宝暦年間に埋立てられ新開となる。境内に入ると樹齢数百年と云ういちょうの古木がありそばに珍しい形の「かざし灯籠」が建っている。

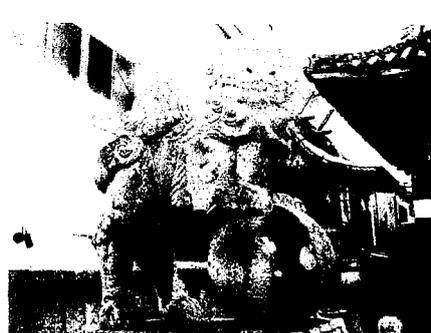
この灯籠には、若旦那とお茶子の悲しい恋物語があり、娘の幽霊が出て「かざしを下さい」と云う声が聞かれたので、かざし形の灯籠を建てて、娘の霊を慰めたという。その後幽霊は出なくなった(説明板を読んで下さい)



入口横に変わった形の燈籠がある。「かざし燈籠」と呼ばれ、悲しい物語がある。



大きく立派な「玉乗り型」狛犬(右)。尾道石工の技と意気込みを示す狛犬である。台座に天保八年丁酉五月(1837)とある。



左の狛犬。台座には辛文政四年六月吉日(1821)とある。

明神の狛犬

拝殿前の玉乗り型狛犬を見て欲しい。高さ 1.5m 全長、1.3m あり台座と連なった一枚岩に彫り上げられている。この大きさと見事な彫りが尾道石工の技を示している。また奉納した商人の経済力も見落としてはならない。

願主は、向って左の狛犬には「富吉屋兵助」とあり、文政四年(1821)の年号が刻まれている。右側の狛犬には「森岡屋」と刻まれ「天保八年」の年号がある。石工については「當所在石工棟梁太助定光作」とある。

なお玉垣には、尾道市制記念とあり、新地の商人関係の名前がある。

八坂神社

巖島神社に合祀されている八坂神社は、もと常称寺境内にあった。正応四年(1291)に疫病が流行したので、鞆の祇園神社の神霊を受けて神輿一体を作り、旧6月7日から14日まで祈願祭礼をしたのが祇園さん(祭り)の始まりである。

その後明暦四年(1658)に三体神輿を作る。祇園祭が盛んとなったのは、宝暦年中からであり、神輿は久保、十四日、土堂の三町にちなんでいる。

夏祭りとして祇園祭は、夏の夜の夕涼みをかねて近隣各地から多くの人々が集まり参詣した。現在は住吉祭りの花火に人出が多く、昔の賑やかさはない。



勤商場の小路。商業を勤めるところで明治期には賑やかなところであった。この先は石段となっていて、江戸初期は海だった。



これが石段で、ここから低くなっているのは、埋め立てられた新地である。



海に向ってゆるやかな坂道になっている石屋町。石屋が集中していて、昭和20年代には両側に石屋が並んでいた。今は石屋は一軒も無い。

尾道石工と石造物

尾道の石工は常称寺大門を南に下る小路が「石屋町」という石屋が集中していた町である。その他、石屋は島々から運ばれてきた花崗岩が積み下ろしのしやすい海岸にも多くあった。

昭和 20 年代頃までは盛んに墓石や灯籠などを造り、ノミの音が聞こえていた。尾道石工の技術は特に優れ、大正天皇の御大典の時、石灯籠を宮内庁に献上した。

尾道石工の活動を示す石造物として松山市の湯釜薬師の石標に「享祿四年（1531）石工備後尾道住口阿」の銘が残っている。尾道石工の手になる石造物は北前船によって、山陰、北陸など日本海側との交易が盛んになると相当搬出されている。これは帰り船として石材を積むことでバラストとして船の安定を図る役目も兼ねたものであった。

石造物として「鳥取市加露の加露神社の石灯籠」には「寛政十二年申 尾道石工勘十郎作」とある。「新潟県佐渡島の小木町宿根木の石橋や神社の鳥居」も尾道石工の手になるもので白山神社の鳥居には「安永二年九月十五日 施主高津勘四郎 石工備後国尾道石工与四郎作」とある。その他「富山県新湊町庄西町日枝神社の石灯籠」「富山県射水郡小郡待十社大神の狛犬」など各地に残っている。私も山口県周防大島の油良八幡宮で「弘化四未十二月」（1847）の年号のある「尾道石工藤原小七郎正光作」と刻まれた狛犬を見ている。

このように各地に散らばっている尾道石工の石造物を確認するのも興味あることである。

尾道酢

水尾町の角に「カクホシ尾道酢」の会社がある。尾道酢は米酢で昭和 20 年代には長江口に酢醸造の店が集まっていた。

尾道酢は江戸中期にかなりの店があったという。造酢の原料には秋田米が使われている。これは「秋田米は品質はよろしいが、小粒なのと砂が混ざっているので、食料としての商品価値が低い。しかし安価なので、そこに目をつけた商人が逆に力をいれたものらしい。」

明治 23 年の統計によると、販売石数が一万石・三万二千元とあり、九州、備前、備中、阿波、石見、大阪などに送られた。



常称寺の門 かなり痛んでいる。屋根に巴紋があるが、それぞれ久保、十四日、土堂の町名をあらわしている。



水尾町通り角にあるカクホシ尾道酢の会社。尾道は米酢でも有名で、北前船で各地に運ばれた。酢屋は長江口に数軒あったが、今はなくなっている。



水尾町の通り。下って行くと以前銀行浜といわれた海岸に出る。今は埋められ公会堂がある。

尾道の小路・町名

戦災による被害を受けなかった尾道は、戦前からの古い雰囲気を感じられる小路や町名が今も多く残っている。小路の入口に、名前を刻んだ石碑があるので気をつけて見て欲しい。

<風呂ノ小路> 鉄道のガードまで続いているが、途中国道によって切られ、道がなくなっている。

<勤商場> この道一帯に商店が並び、芝居小屋も在ったと言う。明治の初め、商家の子どもを商人に養成する塾があったという。突き当たりは階段になってこの下は海であった。

<石屋町> 昭和 20 年代までは両側に石屋がずらりと並んでいたが、今では一軒も無い。だが尾道石工の優れた技を示す石造物が各地の神社などに今も残っている。また北前船によって北陸・佐渡島などにも運ばれている。

＜水尾町＞ 熊野神社あたりの井戸から水が尾を引いたように流れていたのが「水の尾小路」と名づけられたという。現在では昔懐かしい水まつりが復活し、6月の祭りとして賑わっている。

＜神鎮小路＞ こんな小路の奥に神社がある。熊野神社という。その西側に井戸があって「水尾井」と刻まれ、今も大切に使われている。

(中国新聞の記事を読んで下さい) 井戸枠の内側に明治の年号がある。

＜丹花(たんが)小路＞ 古い尾道の小路の情緒を残しているところである。石段を上がると町内安全の常夜灯がある。また井戸があり、整えられた井戸わくからも大切にされていたことがわかる。尾道の街歩きは小路と共同井戸を見るのが楽しい。そこには今も息づいている生活と大切に使われている井戸から生活史がわかる。(中国新聞の記事を見て欲しい)

＜今蔵(倉)小路＞ <三好小路> 大商人の邸宅跡からついた小路名である。

＜小川小路＞ 豪商小川氏(笠岡屋)の邸宅があった場所から名がついている。

＜杓屋小路＞ (叶小路ともいう) ベニヤ文具店から諫見医院までの道をいう。木製の杓を作る店があったからで、以前は「田面舟」を作る店があった。

この道から国道を越えて長江通りに入って行く道が昔の道である。

＜薬師堂＞ 中国銀行(元西原銀行跡)から南に下る道で、道幅が広いのは東側半分が戦時中の建物疎開で広げられたからである。

以前成福寺があって薬師如来が安置されていたことから、薬師堂と呼ばれる。

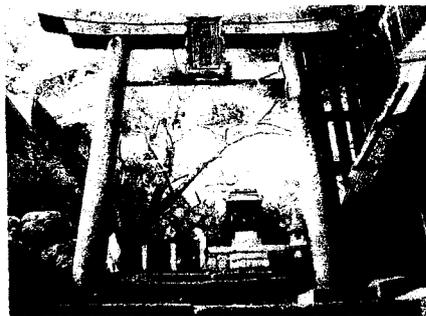
＜浜ノ小路＞ 中浜通りに通じる道から呼び名がきている。

＜津の国屋小路＞ 尾道郵便局南の道で津国屋の邸宅があった場所である。

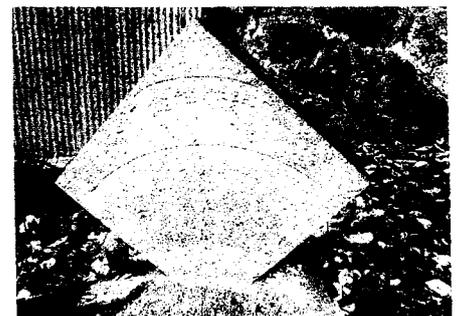
＜一里塚跡＞ 山崎清春商店東側の小路に一里塚があったといわれ、地名が残っている。



水尾町の通りを北に入る「神鎮小路」。この奥、突き当たりに熊野神社がある。



熊野神社の鳥居と社。鳥居には文政六癸未五月とある。



境内に「皇太子殿下下行幸記念」と刻まれ下に神社修繕寄附者の名前がある。



この狛犬が面白。胴体は二つに割れて、足が短い。こんなに短い足の狛犬は初めてである。



水尾井と刻まれた井戸枠。旧尾道町内のいたるところに共同井戸がある。



西側の小路から出て行く。

「昔はそうめんを冷やしていたのよ。大事な水です」と教えてくれた。

住民は交代で月一回、井戸の周りを掃除する。二、三年に一度はポンプで水をくみ出し、内部の汚れを取り除く。今川さんは「飲めんよ」うになったら、それだけ地

「地域の水がめ」を住民らが守り続ける



球が汚染されたということ。この水を孫の世代まで引き継がない」と語る。

水尾井戸と、本通りから南に延びる水尾町通りでは毎年七月、水祭りが開かれる。水を噴き出す水細工が並ぶ夏の風物詩である。(田儀慶樹)



尾道市久保1丁目

水尾井戸

尾道市中 心部の本通り商店街の東側。通りに面した幅一・五坪の路地を進むと、石畳の小さな広場に出る。その一角に水尾井戸はある。水深は約五メートル。江戸時代に掘られた豊かな水源を地元の水尾町町内会(十三世帯)が守り続ける。「お茶にしたら、水道水と比べてまろやかさがまるで違う」。青々とした水面をのぞき込み、茶・茶道具販売の今川吉弘さん(62)が自慢する。一九二五年、一帯に上水道が引かれるまでは住民が調理用や風呂水と

路地の潤い 江戸期から



本通の出口から出てきた路地を見たところ。この奥に井戸があった。



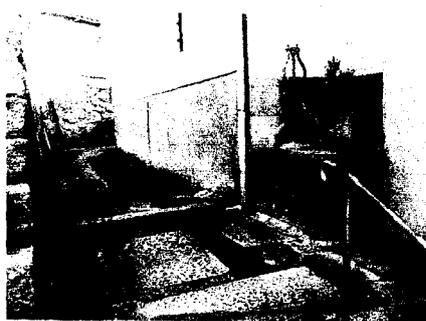
丹花小路。進むと石段となり、常夜灯がある。



西側の小路に行く。この道が丹花小路で久保から長江に抜ける道であった。



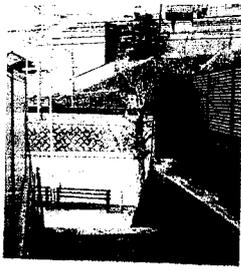
今も昔の風情を残している丹花小路。常夜灯前を通り、石段を上がって行くと長江通りに繋がっていた。



常夜灯そばの井戸。この先には、戦前の感じを残す住宅があり、行き止まりとなる。



常夜灯から見た小路の風景。昔の尾道の面影がよく残っているところである。



ここから線路を越えていく道があったが建物疎開で道や家屋が無くなった。また線路を渡る道も閉鎖され、向こう側に往けなくなってしまった。



国道側の下ったところ。丹花（たんが）小路の碑がある。

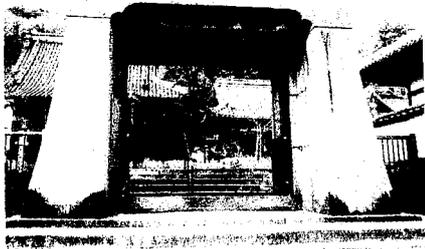


国道と山陽線を越えた上に「福善寺」がある。福善寺の山門について「ええもん（りっぱな門）は福善寺、かたい門は持光寺」といわれている。

福善寺

丹花小路の石段を上がると、正面に福善寺が見える。この道から線路を越えて向こう側の長江通りに行けたが今は行くことができない。福善寺の参道石段を上がると立派な山門がある。扇に精巧な「鶴の丸」が彫ってあり、昔から「ええもん（門）は福善寺 かたい（門）は持光寺」と云われてきた。「ええ門」を入ると「鷲の松」がある。この寺は「ミステリーイン尾道」の例会で行ったところである。

この寺にはいいものがもう一つある。それが平田玉蘊の『雪中の松竹梅』で六枚の金の大襖に描かれている。墓地は丹花城跡で、この城は持倉修理太夫則秀・子の右衛門太夫則保父子の居城で、大きな「五輪塔」が二基ある。尾道で最大の五輪塔で、持倉父子の墓だと伝えられている。持倉氏は木梨杉原氏の家臣であった。



「ええ門は福善寺 かたい門は持光寺」と言われた持光寺のかたい石の門。立派な門である



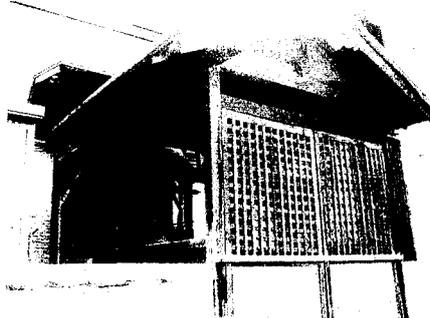
福善寺の墓地は丹花城があったところで、城主の「持倉修理太夫則秀、子の右衛門太夫則保父子の墓」がある。



持倉父子の墓標碑 持倉氏は木梨杉原氏の家臣である。



もう一つの小路の「八軒小路」に入っ
て行く。ここを左に折れる。



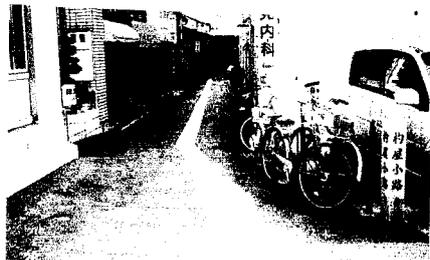
お宮があるが、名前がわからない。
胡神社かな？と思っている。



杓屋小路に出てきた小路を見る。こ
んな狭い道が通り抜けられるとは知
らない人が多い。



国道側の杓屋小路入口にある磯の辯
天社。

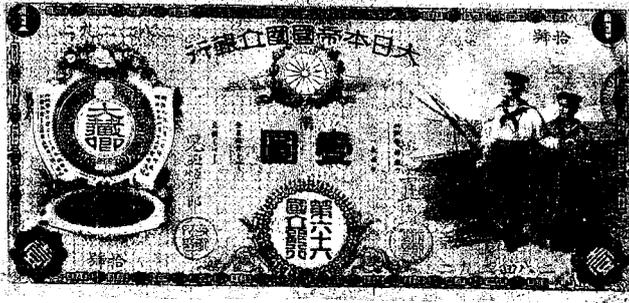
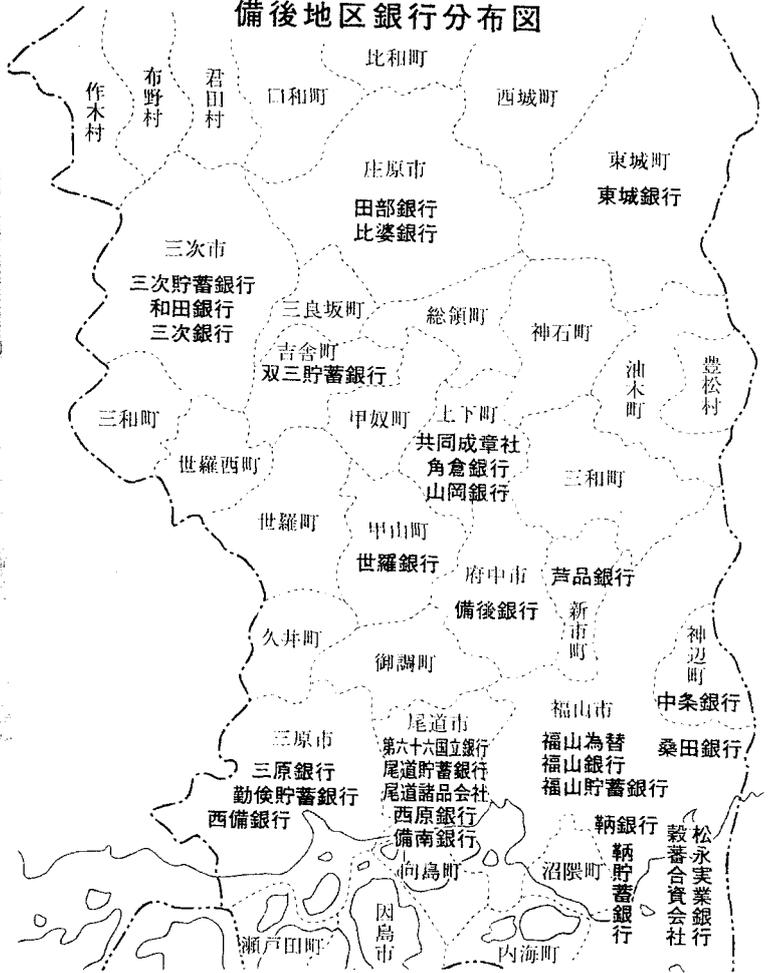


杓屋小路を見る。進むと本通りと交
差する。そこを真っ直ぐ入る道が小
川小路である。



小川小路。下ると米場町に出る。この
小路一帯に豪商、小川氏（笠岡屋）の
邸宅があった。

備後地区銀行分布図



明治12年4月に発行された第六十六国立銀行一円紙幣
(上=表面、下=裏面。)

「ふるさとの銀行（備後編）より

明治十一年、県下で最初に設立された第六十六銀行以降、昭和二十年に一県一行政政策によって芸備銀行（昭和25年に広島銀行と商号変更）に統合されるまでの備後地方の銀行分布図。

尾道の銀行

明治五年「国立銀行条例」が公布され、明治九年には条例が改定されて国立銀行の設立が容易となり、明治十二年までに百五十行あまりが設立申請を行った。

県内では明治十一年三月に最初の銀行として尾道町に、六十六番目とした第六十六国立銀行が設立された。銀行の資本金は十八万円で、設立に関わった尾道商人は御三家と言われる天野、橋本、島居家である。明治十二年設立された広島に本拠を置く第四十六国立銀行は資本金が八万円であった。これを見ても当時、尾道の経済力がいかに大きかったかが理解できる。ところで「国立銀行」の名称がついているが、国立ではなく私立の銀行である。

第六十六国立銀行は発券銀行として独自に銀行券を発行していた。（写真を参照）銀行については『おのみち歴史博物館』を見学するので、展示物や写真などを見てください。



米場町の通り。右の場所に住友銀行があった。昭和初期まで栄えた場所である。



大正12年に出来た旧尾道銀行の建物。のち広島銀行東支店となり、「おのみち歴史博物館」として開館している。この一帯は「銀行浜」と呼ばれ、かつては尾道の金融・経済の中心地であった

住吉浜と住吉神社

江戸中期頃から中継貿易港として日本海から北前船の入港が増加し、商品流通が盛んになると荷揚場の拡張が迫られる。そのため中央海岸に近い海岸を埋立てることになった。

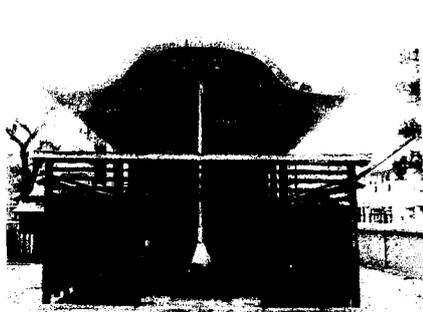
元文六年（寛保元年）（1741）に藝州藩は平山角左衛門尚住を尾道奉行に任命し、中浜通りより南を埋める築港工事に着手させた。奉行の下に町役人として豪商で町年寄りの鯛屋三郎右衛門、泉屋彦右衛門やその他商人たちが参加し、654坪を埋立てた。

築港が完成すると平山角左衛門は、浄土寺境内にあった海上神の住吉明神社に家伝の刀を奉納して神明に感謝し、神社を住吉浜に勧請した。境内には「平山霊神社」も祀られている。

尾道商人たちは平山奉行の功績を讃えて、明治29年に浜問屋の人々によって「平山奉行頌徳碑」が建てられている。尾道市は平山角左衛門を尾道の港発展の恩人として「尾道名誉市民」している。墓は広島から浄土寺に移されている。

なお住吉神社の境内には「文政三年庚辰六月吉日」（1820）の年号が刻まれた標柱がある。これは県内最古の標柱である。

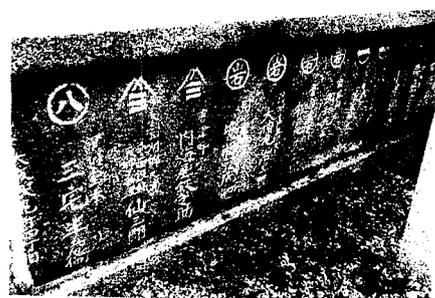
完成した住吉浜に北前船が着くと、日本海側の物資である庄内米、越後米、ほしか、塩ぶり、北海道産の昆布、にしんなどが取引された。尾道から北陸地域への下り荷として塩、酒、酢、たたみ表、錨、綿などが運ばれた。また尾道石工による石造物もあった。



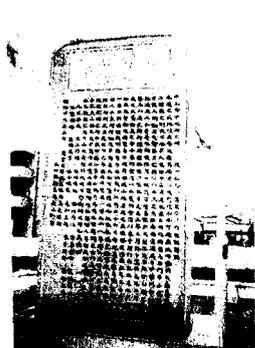
住吉神社の社殿。平山奉行を祀った「平山霊神社」もある。



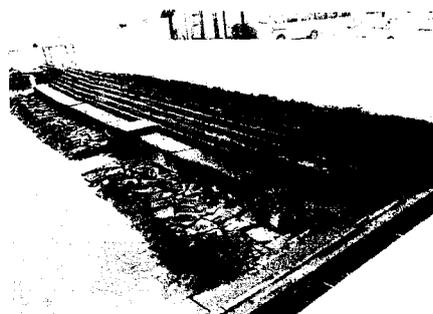
北側入口にあった標柱。最も古い標柱で「文政三年庚辰六月吉日」の刻銘がある。



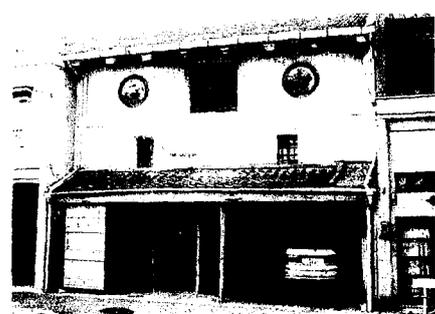
玉垣の塀には「豊後、防州富海、唐津呼子」などの地名がある。各地から舟が寄港していることがわかる。



平山奉行頌徳碑。平山角左衛門は尾道市の名誉市民である。



今も残っている「がんぎ」。船に荷物を積み込んだり降ろしたりするのに必要な石段である。



住吉海岸通りにただ一軒だけ残っている昔ながらの倉庫。以前はこの通りに蔵が並んでいた。

塩ぶり市

浄土寺の宝物館には、住吉浜から東浜にかけて「ぶり市」開催の大絵馬がある。ぶり市は幕末から明治末頃まで開かれていた。その塩ぶりを使った「雑煮」が尾道商人のメニューであった。塩ぶりが入ってこなくなると、地元で取れる「あなご」を入れるのが一般家庭での雑煮となる。だが昔からの商家では今もぶりを入れた雑煮を続けている家もある。

次の資料を読んでください。

「尾道のお正月」雑煮の話

2006年1月22日(日)

尾道学研究会例会『尾道のお正月』

天野家お雑煮 穴子ではなく塩ぶり

浄土寺に残る「鱒(ぶり)市」を由来に

尾道学の構築と実践を旗印に、実のある実践・行動を着実に積み重ねていこうという尾道学研究会が、先日第2回目となる新春例会を開催した。

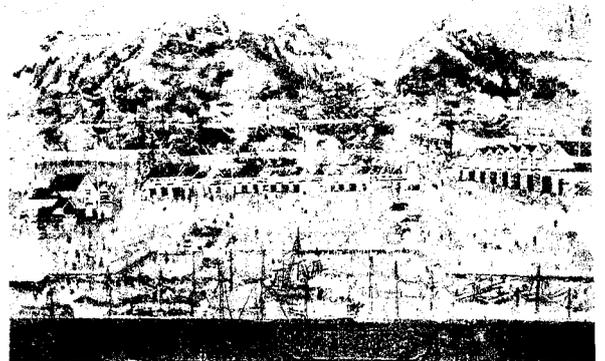
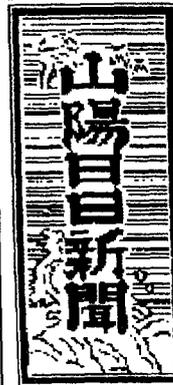
今回のテーマは『尾道のお正月～味わいと語らいの夕べ』と題して、市文化財保護委員・天野安治氏のお宅に伝わるお雑煮を参会者皆で頂きつつ、尾道の雑煮・正月談義で新春を寿ぐ例会となった。

尾道の旧家・天野家伝承のお雑煮は、主流のアナゴではなく塩ブリを入れる雑煮で、このブリを5日間塩漬けにするのが特徴といえる。その他具材には金時人参・ゴボウ・里芋・大根・水菜の野菜類に、餅は通常の丸餅。ダシは昆布とカツオ。盛り付けも上品で、大根の上に餅を載せ(これはお椀に餅がつかぬ配慮)、その上に野菜類を彩りよく盛り付ける。

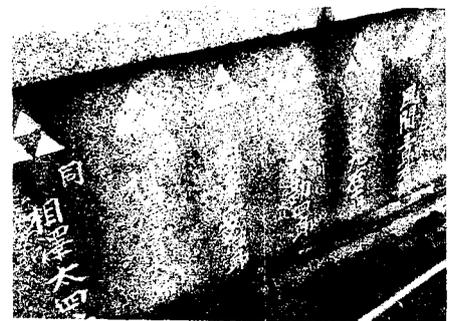
天野先生による雑煮の解説に始まり、日本列島及び広島県各地の雑煮文化を勉強した(以下にレポート掲載)。

【天野安治先生による解説より】江戸時代(天保8年)に開設された、当時の倉庫業兼金融業である「諸品会所」の運営に、私どもの祖先が携わって来た歴史がある。明治になりこれが諸品株式会社になるわけだが、そこで尾道へ入って来る塩ブリの取引をする市が年末に立っていた。

昔は生のブリという事はこの辺りではあり得ず、みな塩ブリであった。その大量に入ってくる塩ブリの代金の決済を、諸品の方で引き受けてやっていた様である(代金を徴収して支払う、その間に一時的に貸し付けもする)。そういう由縁で必然的に塩ブリが身近にあるという事から、これを雑煮に使う様になったのではないかと思う。



浄土寺の絵馬(鱒市)



こちらには越後糸魚川と刻まれ、北前船が寄港している。

近世初期から明治期の豪商と尾道の経済

尾道町は毛利氏によっても重視され、豪商の渋谷、泉屋、笠岡屋などが御用商人として力を持っていた。福島氏の時代になっても尾道では五人の年寄と六十人の月行事の衆議によって「自治」組織が運営されていた。寛永十五年（1638）の地詰帳（検地）によると、最も多く屋敷を所有していたのは笠岡屋である。

だが浅野氏の時代になると「自治」的機構は解体して、正徳五年（1715）に尾道町奉行が置かれ、町方組織による用務が執行されていく。寛文年間になると北前船が寄港し、中継的問屋として商品流通が展開していく。

灰屋（橋本家）や鯛屋（勝島家）などの有力問屋は、北陸の米、ほしかや北九州、山陰、北四国の米、雑穀など諸国の物産を預かり宿、転売を中心とする商事取引関係を結んでいた。

元文五年（1740）にはこれら有力問屋は65件の問屋株を定め、特権化するようになる。灰屋は蝦夷箱館と商事を行う特権を得て、尾道から古手物（古着）、碇などを移出している。

有力問屋である鯛屋へは、寛政十三年（1801）の一年間に入船した船は388艘である。化政期頃になると北国、九州から尾道港への廻船が減少し、尾道の有力問屋は経営不振に陥ち文政以降、幕末にかけ笠岡屋、鯛屋、塗屋、唐津屋などの問屋が没落していった。

これに対して藩は諸品会所を開設し、商業資本の融通を図り弱体化した尾道問屋に対しててこ入れをするが、もとの盛況を取り戻すには至らなかった。

明治維新後は、橋本吉兵衛、天野嘉四郎、島居儀右衛門など有力問屋や新興商家などが出資した第六十六銀行の設立で尾道経済界は動いていく。

尾道の富籤

幕末になると全国的に富籤が開催されてくる。小さな場合は民間の興行であったが、藩財政が苦しくなると各藩で行われるようになる。

広島藩では宮島、尾道、御手洗、下蒲刈、三ノ瀬などで開催されている。尾道の富籤は宝暦二年（1752）に行われたと記録がある。天保から文久の頃は特に盛んに行われていた。

表面的には幕府の禁令下のもとであるため、藩営の形はとっていないが実質は藩営であった。富籤の名称は幕府に遠慮して特産物の名を付けていた。

尾道は『豊表入札』の名称で行われ藩内最大のものであった、籤のやり方は、富箱の上にまたがり突き子が当り札を突き木駒を取り出す方法であった。最大の当たり籤は「千両富」で江戸・大坂ではまれな大富であった。藝州藩での富籤興行は、文久三年から明治二年間では前後十二回あり、藩の利益は平均1千両ほどで藩の収入となった。



尾道豊表入札興行の図（市立尾道図書館蔵）



尾道豊表入札、千両当籤銀渡し証（吉田松太郎氏蔵）



郵便局前の小路。築出小路となっているが津の国屋小路とも言う。この道も広げられている。



浮御堂小路。海辺にあったお堂が海水に浮かんでいるように見えたことから名がついた。



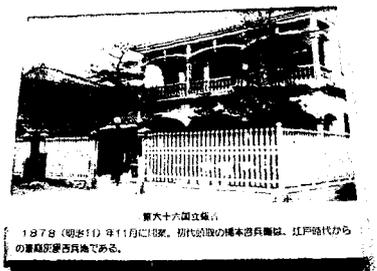
大和湯の建物。風呂屋の建物と内部をそのまま生かして商店にしている。



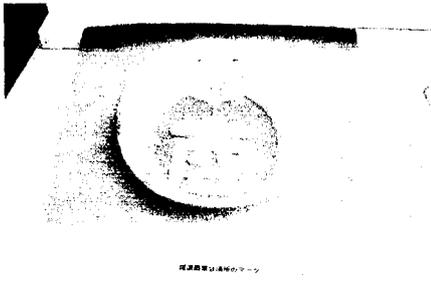
尾道商工会議所の建物（大正十二年）
尾道商工会議所は全国で30番目になる。



商工会議所の議場。当時のままである。



第六十六国立銀行のパネル写真。広島県で最初に設立された銀行である。



商工会議所のマーク。鶴が図案化されている。尾道の港は鶴湾といわれることから鶴を図案化したのが多い。鶴を用いた校章では「尾道東高の羽根を広げた鶴、尾道商業の折鶴」などがある。



会議所のそばにある「奉行所跡」。この附近に奉行所があった。



桂馬蒲鉾店横の道を石畳小路と云うがアスファルト舗装で石が見えない。



この小路附近に尾道一里塚があった。塚本という地名が残っている。この近くにある山崎刃物店あたりに本陣があったという。



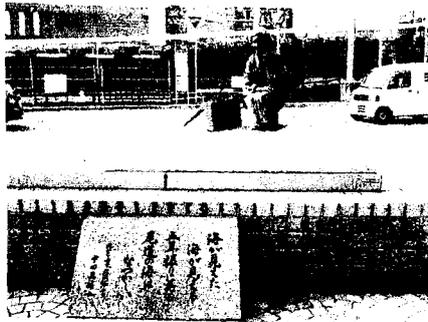
戦前の感じがまだ残っている「うずしお小路」。海岸側に林芙美子の碑がある。



うずしお小路横にある「喫茶芙美子」
林芙美子一家はこの二階に間借りしていた。元は宮地醤油屋である。



終点の芙美子像前。



林芙美子像。よく知られている「海が見えた 海が見える 五年ぶりに見る尾道の海は なつかしい」と放浪記の一節が刻んである。



旧山陽道は踏み切りを渡って西に続く。

林芙美子の著書から尾道の情景を見る

林芙美子の作品には、大正から昭和初期の尾道の様子が活写されている。それらの作品を読むと懐かしさがこみ上げてくる。

尾道に関わる作品として、『市立女学校』『一人の生涯』『初旅』『故郷の琴』『田舎がえり』『風琴と魚の町』『放浪記 第三部』などがある。

『故郷の琴』 私のそだった尾道と云ふ町では、色々な藝ごとがさかんであった。町を歩いてみると三味線や琴を商っている店や、陳列のなかに編目のこまかい置を敷いて、罫や茶釘を飾ってある葉茶屋の店や、何時も赤い毛氈の敷いてある棚に、池坊流何とか云ふ花の活けてある家などがあって、女学校に行く頃になると、みなそれぞれ、女の子たちは色々なものを習ひはじめてゐた。

『田舎がえり』 尾道の駅には昼すぎについた。新しい果物屋、新しい自転車屋、新しい栈橋、何か昔と違った新鮮な町に変わっていた。道も立派になり女車掌の乗っている銀色のバスが通っているけど、今だに昔と変わらないのは、魚臭いことだ。

『放浪記 第三部』 尾道に着いたのが夜。むっと道のほてりが裾の中にはいつて来る。とんかん、とんかん鐵を打つ音がしてゐる。汐臭い匂ひがする。少しもなつかしくはないくせに、なつかしい空気を吸ふ。土堂の通りは知ったひとの顔ばかりなので、暗い線路添ひを歩く。

星がきらきら光ってゐる。蟲が四圍いちめん鳴きたててゐる。鐵道草の白い花がぽおっと線路添ひに咲いている。神武天皇さんの社務所の裏で、小學校の高い石の段々を見上げる。右側は高い木橋。

この高架橋を渡って、私ははだして學校へ行ったことを思ひだす。線路添ひの細い路地に出ると『ばんよりはいいやせんかア』と魚屋が、平べったいたらひを頭に乘せて呼賣りして歩いてゐる。

夜釣りの魚を晩選りと云って漁師町から女衆が賣りに来るのだ。持光寺の石段下に、母の二階借りの家をたづねる。

参考文献、転載資料及び史籍

- ・尾道散策(財間八郎)
- ・尾道今昔(入船裕二)
- ・尾道の息吹(友野幸人)
- ・新修尾道市史(一巻 三巻 六巻)
- ・ふるさとの銀行物語(備後編)(田辺良平)
- ・尾道の民俗・伝説(尾道民話伝説研究会)
- ・尾道と林芙美子・アルバム(尾道読書会・林芙美子研究会 編)
- ・ふるさとと城(山陽日日新聞社)
- ・宮(郷土の宮)(山陽日日新聞社)
- ・郷土の石ぶみ(山陽日日新聞社)
- ・寺(郷土の寺)(山陽日日新聞社)
- ・藝藩通誌
- ・沼隈郡誌
- ・しまなみ海道近代化遺産(大成経凡)
- ・近世尾道の発展と商人(広島県立文書館)
- ・地方都市商人の世界(広島県立文書館)
- ・高須 知っておきたい今昔マップ(高須地区協議会)
- ・尾道市街地図(昭和三年版)
- ・備後の歴史散歩(下)(森本 繁)
- ・尾道案内(大正四年発行)
- ・尾道市文化財春秋(尾道市文化財協会)
- ・中国新聞
- ・山陽日日新聞
- ・新版尾道の記録

大元山古墳の謎

田口義之

古墳時代を前・中・後期の3期に分ける区分法によると、それまで古墳文化の中心として栄えた神辺平野周辺には目立った古墳が見られない、なぜだろうか…。

二通りの解釈がある。一つは、この時期、備後南部は吉備の勢力下にあつて、強大な吉備政権に統合されていたとする考えだ。古墳時代中期といえば、吉備の中核では「造山」「作山」という畿内の天皇陵に匹敵する巨大古墳が築かれた時代である。造山古墳は全長360メートルと全国第4位の規模を誇り、一説によると五世紀半ばでは日本最大の古墳であつたという。同時期、畿内にはこの古墳に匹敵する古墳は築かれなかつたというのだから、その被葬者の権力のほどが想像される。ある学者は造山古墳の主は「倭王」に違いないという。

しかし、別の見方もある。この時期、備後南部の支配者は、自己の墳墓を神辺平野ではなく、松永湾岸に築いたとする考えだ。事実、松永湾岸には五世紀代の大型古墳が連続的に築かれている。神村町の松本古墳は全長50メートルの帆立貝式古墳で、後円部のみでも径40メートルに達する大古墳である。また、尾道市高須町の黒崎山古墳は、形の整った前方後円墳で、破壊前の測量では70メートルの規模を持っていた。

だが、50メートルや70メートルではやや説得力に欠ける。相手は300メートルを超える大古墳なのだ。

ところが、この説を補強する有力な証拠が現れた。黒崎山古墳の北東側に存在した「大元山古墳」の全長は150メートルあつたとする証言だ。この古墳は今まで全長

50メートルの小型の前方後円墳であつたと紹介されてきた。広大の潮見浩教授が『日本考古学年報』17号で発表された「広島県尾道市黒崎山古墳」の中で、大元山古墳の規模を全長50メートルの前方後円墳と記されたからだ。

この古墳の跡である尾道市の旧浄水場に立って見ると、地形から50メートルの前方後円墳とはとても思えない。麓からの観察では相当な大古墳に思える。有力な証言がある。実際にこの古墳の破壊に立ち会われた故村上正名先生は、筆者に大元山の古墳の方が黒崎山古墳よりはるかに大きかつたと証言された。また、尾道市の考古学者森重彰文氏も筆者の質問に、50メートルは150メートルの誤植だと答えられた。

大元山古墳が全長150メートルの大前方後円墳であつたとすると、これは立派な地域の大首長墓である。この時期、備後南部は吉備中核の支配下にあつたのではなく、吉備中核と並んで大和朝廷の構成員であつたことになる。なぜ、古墳を松永湾岸に築いたのかの謎は残るが…。

